

# 松 下 幸 之 助 翁 を 語 る

松下幸之助翁に長年薫陶を受けた

木野親之・松下電器産業終身客員をホスト役に、毎回、翁を知るゲストを迎え、

翁の経営哲学と人間哲学を深く掘り下げる1年間のシリーズ企画

第1回は、元松下電器社長の谷井昭雄氏

[今月のゲスト]

松下電器産業株式会社特別顧問

## 谷井昭雄

V.S

[ホスト]

松下電器産業株式会社終身客員

## 木野親之

撮影=高橋 昇

photographs by  
Noboru Takahashi

写真資料提供=松下電器産業(株)



## 日米の経営スタイルのはざまに

### グローバルスタンダードを生んだ国

1990年代の「金融ビッグバン」に始まるアメリカの巨大資本は、瞬く間に日本を覆いつくし、名だたる銀行や大企業の一部はその軍門にくだった。われわれ中小企業でも、「グローバルスタンダード」というアメリカ主導の経済原理の大波の影響を受け、先祖から築いてきた日本的な経済や経営原理が通じなくなった。

アメリカは、善と悪、勝ちと負けと対立しながら、白黒をはっきりさせる二元論のグローバルスタンダードを生んだ国である。日本人はもともと物事を論理的には考えない民族である。アメリカ的な、①株主を頂点とした会社経営、②プロの経営者と資本家の分離、③スピードの速い会社経営、④会社の売買を前提とした経営、⑤能力主義の人事評価、⑥早い昇進と解雇の自由、⑦時価会計主義などは、きわめて合理的なスタイルで、日本の中小企業は、まだこの考え方を十分には咀嚼できていない。

### 日本の「この国のかたち」

しかし日本は、この国の初めに中国や朝鮮半島から儒教や仏教などの大陸文化を輸入したときも、明治に資本主義の思想を、敗戦後に民主主義的思考を輸入したときも、単なる模倣ではなく、それらの考え方を十分にマスターしたうえで日本流に磨きかけ、和魂洋才という隠し味を加えて、世界に誇れる経済や経営の制度をつくり上げてきた。

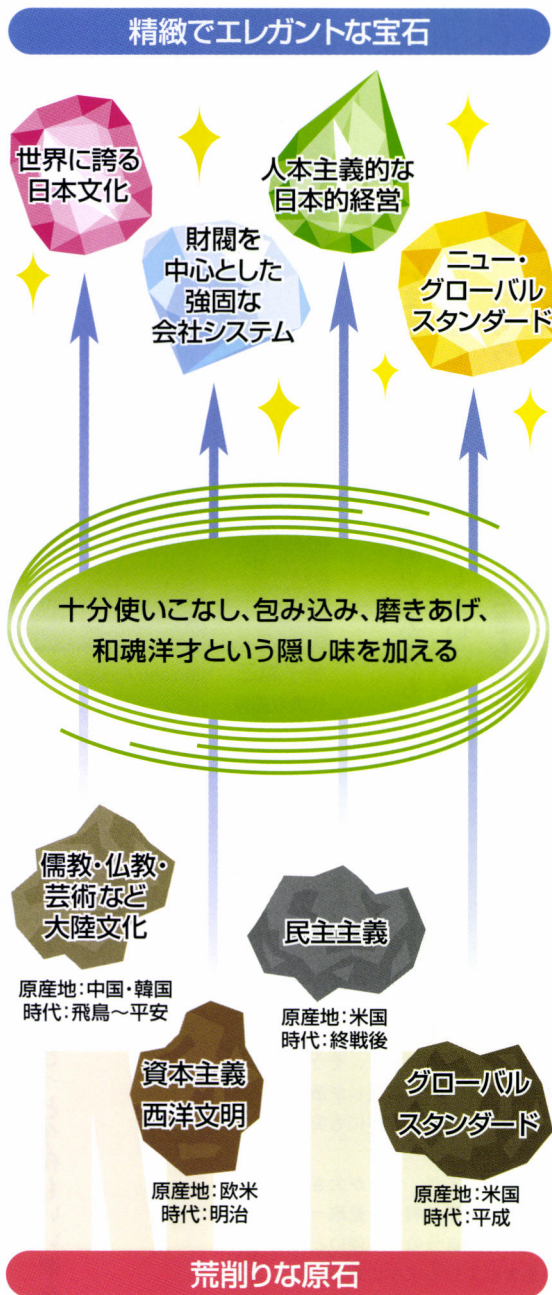
日本人がものの考え方を輸入して、日本独特の制度につくり替えたことは恥ずかしいことではなく、むしろ、日本が世界に誇れるビジネスモ

太成学院大学 教授

釣島平三郎

text by Heizaburo Tsurushima

### 日本の伝統的なビジネスモデルとわれわれの世代の責務



デルであった。司馬遼太郎氏も『この国のかたち』で、「日本人は、思想はいつも外から来るものと思っている」「むろん、かつての日本人がそういうものを生み出さなかったというのは、べつに恥ずかしいことではない」と言っている。

### われわれの世代の責務

しかし平成の激変期には、もはやいままでの日本的経営では、中国との競争に代表される国際競争に生き残れない。グローバルスタンダードという原石を日本流に磨きあげて、世界に向けて「ニュー・グローバルスタンダード」を発信することが、われわれ世代の責務である。なぜなら、ハリケーン「カトリナ」に見られるように、世界をリードするアメリカのグローバルスタンダードという原石にも、陰の部分があるからである。

トヨタ自動車は、将来の地球の化石燃料の枯渇を見据えて、アメリカの競争相手でも真似のできない、ハイブリッド車や燃料電池車を開発し、会社経営においてもGMやフォードをしのぐ新しい経営を実践している。これは、「ニュー・グローバルスタンダード」のひとつのヒントではないだろうか。

### 著者プロフィール

1942年生まれ。慶應義塾大学商学部卒。卒業後ミノルタに入社。1988年Minolta Advance Technology社副社長を経て社長。1997年Minolta systems lab 社長。アメリカ駐在約17年。2001年帰国。2002年つるしま経営事務所設立。2003年太成学院大学経営情報学部教授。著書に『アメリカ 最強のエリート教育』（講談社+α新書）などがある。